『北米遊記』にみる 20 世紀初頭アメリカの慈恵救済事業と家庭学校

A Late-Meiji Japanese Perception of American Social Reform in *Hokubei Yuki* and Family School for the Delinquent Youth

小塩　和人
OSHIO Kazuto

The purpose of this research note is to historically examine what a late-Meiji Japanese social reformer observed and kept record in the United States during the Progressive Era, particularly between June 1910 and March 1912. In the early twentieth century, Japanese as well as American new middle class reformers in such fields as social work, education, and psychiatry sought to define social problems and reorganize people's daily lives. One model they looked for was social policy and correctional reform which helped create special judicial and correctional institutions for "troublesome" youth. In short, this paper illuminates a trans-national cultural perception of American ideas about the biological and environmental origins of crime attributed both to the positivist tradition in European criminology and to anti-urban sentiments associated with the rural, Protestant ethic.
Keywords: family disintegration, juvenile delinquency, Japan, the United States, the 1910s

I

1915（大正 4）年 4 月 23 日に『北米遊記』と題した書籍が中央報徳会

から出版された。[1] 時あたかもアメリカ合衆国（以下アメリカと略す）西海岸において日本人移民排斥が本格化するにともない、日露戦争後の日米関係が悪化をたどり、日本のアメリカ認識も変化していた。[2] 出版直前に本書の紹介記事が家庭学校の機関誌『人道』第 120 号（1915 年 4 月 15 日）に掲載された。それによると「著者滞米二年、彼邦の慈恵救済事業の真相より人情風俗の微に至るまで親しく観察する所あり、其の奇警にして深刻なる観察は、深く米国文明の長所と弱点とを観破し、随所随感、発して流麗の文となる。」そして「真摯の裡に滑稽を蔵し、人を魅了して覚えず巻を終らしむるものあらん。対米問題の熾んに論議せらるる今日、彼邦の真相を知らんとするものは本書を一読せざるべからず」とある。[3]

その内容は、26 の小論に加えて、付録として「日本人の米國觀」と「旅の塵」の 2 篇からなる本文 228 頁で、定価は 50 銭である。「序言」には「これは僅々二年間の北米遊記の一端なり。飛び歩きながら見物して、先輩知友に通信したるものの中より抜き集めたるものにして、素より瞥見の一二に過ぎず、且つ雑然とし駢べたれば、所謂有り合わせものを一包みにしたるが如し。」つづけて「世話を受けし人々に土産を呈せざる可らず、御粗末ながら土産のしるし迄にかくは纏めつ。細を穿ち微に入りし観察録は改めて他日のことといたすべし。大正四年四月　東京巣鴨にて　静堂生」とある。本稿の目的は、本書の著者がアメリカ視察において見聞した事柄を時系列的に並べ、歴史的文脈の中に置き直し、その意味を検討するものである。

本書の著者が有した「醒めた目で観察しようとする姿勢」という結論を

1　中央報德会は、明治 38 年 12 月に留岡幸助らが発起人となって開催された二宮尊徳翁没後 50 周年紀念会に、内務省を中心とする官吏さらには民間人が加わって結成された報德会の後継組織で、本稿でも参照している『斯民』の発行元である。山本幸規「解説　『人道』について」山本幸規『「人道」解説・総目次』（不二出版、1983 年）11 頁を参照。

2　例えば、澤田次郎『近代日本人のアメリカ観　日露戦争以後を中心に』（慶應義塾大学出版会、1999 年）ならびに長谷川雄一編『大正期日本のアメリカ認識』（慶應義塾大学出版会、2001 年）を参照。

3　家庭学校は、1899（明治 32）年に東京巣鴨で感化院として創設された。創始者の留岡幸助は、1888（明治 21）年に同志社卒業後、伝道師かつ教誨師として活動し、アメリカ留学から帰国して家庭学校を創設した。キリスト教を精神的な支柱として、夫婦の職員を寮長、寮母とする家庭的な雰囲気のある家族舎に住まわせること「家庭にして学校、学校にして家庭」を旨とした施設である。留岡幸助『家庭学校』（警醒社、1902 年）、留岡幸助『自叙家庭学校』（日本図書センター、1999 年）。

先取りするために、以下を引用しておく。「亜米利加は今猶発達変遷中にて、未だ国風一定せず。軽々しく暗黒面のみ見て之を悪ししと即断し、光明方面のみを見て、文明の枠とするを得ず、混々たる有様にて有之候。」日露戦争を機に対米観の振り子が大きく振れる中、極度に単純化した善悪論を排そうという。「唯其国の気運は旺に有之候。何事にも大に骨折り申候。倹と勤、犠牲、奉公などの精神は見るべからず。万衆悉く自利的、自己本位に御座候。是等に対する救済方面のみを見て、直ちに日本に持ち行き、ヤレ禁酒、ヤレ菜食論、ヤレ献身、ヤレ慈善と叫ぶは大早計にあらずやと存候。」[4] ここからは、外国研究を通して実践的教訓を得ようと試み、冷徹に観察してやろうとする姿勢が見て取れよう。

事実、20 世紀初頭のアメリカ社会は大きな変化を経験していた。特に、物質的豊かさにひきつけられて多くの移民たちが南や東ヨーロッパから大挙して押し寄せ、ボストンをはじめとする大都市に労働者として移り住んできた。彼ら未熟練労働者たちにとって、その労働賃金は低く、労働条件も劣悪なものであった。このような状況に対して、政府はまだ積極的な役割を果たすに至ってはいなかった。貧困に苦しむ者たちを救おうとしていたのは、地元の慈善事業あるいは移民集団の互助組織が中心であった。つまり従来の慈善事業は、宗教あるいは道徳的な動機に基づいた行為であったと言える。[5]

この時期の諸都市において、労働者の最低賃金確保と婦人参政権の獲得とが公共政策課題の中心であった。その中で、マックレイカーと呼ばれる暴露ジャーナリストたちは、資本家たちによる労働者搾取の現状、さらには貧困者たちが閉じ込められている都市スラム街の悲惨さ、未成年者による犯罪や売春行為などをセンセーショナルに報道することで、大衆に改革の必要性を訴えかけ、政治や行政の対応を迫ったのである。[6] こうして 20 世紀初頭には貧困に対する社会的概念が少しずつ変わろうとしていた。そ

4　この引用部分について、室田保夫は『キリスト教社会福祉思想史の研究　「一国の良心」に生きた人々』（不二出版、1994 年）注（71）333 頁において、中央報徳会の機関誌『斯民』第 6 巻 3 号（1911 年 6 月 7 日）に収載された「米国ボストンより」の一節として紹介している。

5　Simmons College. *The Department of Social Work*. Boston: Simmons College, 1915, p.8; 小塩和人「浅賀ふさ (小栗将江) と世紀転換期のアメリカ合衆国における医療社会事業教育」日本女子大学総合研究所『紀要』5 号、2002 年、188-194 頁も参照。

6　例えば「児童の問題即ち是国家の問題也」と『貧児論』で主張したジェイコブ・リースについて、本稿が研究対象とする小塩高恒が「玉屑互片」『家庭之覚醒』（中央報徳会、1923 年）193 頁で言及している。

れまでは、本人の能力と責任とによって貧しい状況に自らを追いこんだ貧困者という考え方が一般的であったのに対して、個人の問題としてではなく社会全体の問題として公共の組織、つまり政府が貧困を解決すべきだとする論調が強まった。この時期、科学的知識を活用すれば人間の力でいかなる問題も解決できるし、また解決すべきである、という、いわば楽観的な価値観が台頭しようとしていたのである。

貧困問題への対処は、19 世紀末まで私的慈善事業として行われ、宗教団体が中心となり、そこでは育ちの良い上流階級の女性たちが都市のスラム街で活動する、というものであった。ボストン、シカゴ、ニューヨークなどの大都市で活躍する彼女たちには専門知識が備わっていたわけではなく、強い信仰心から弱者を救いたいとの思いに支えられていた。これに対して、貧困救済にあたっては正しい知識と訓練とが必要である、との認識が生まれつつあった。事実、いかにして社会的に苦しんでいる人々を救ったら良いのか、という実践的方法論は、科学的に整理統合された形で教授されるのではなく、慈善事業を行っている組織のなかで働きながら体験しつつ身体で覚えていく、という非常に非効率的なものであった。[7]

さて、近代日本の感化教育を研究した村山幸輝によると、『北米遊記』の著者である小塩高恒（1872-1943）は「明治五年十一月に丹波綾部町に生まれた。父はその翌年から隣村の小学校教師になり、高恒は幼年時代を『山静かに水清き純朴なる山村』で暮らした。明治十五年から、かれは新潟に在住する叔父のもとで暮し、小・中学校に進み、その傍ら北越学館で英語を学んだ」という。「この間宣教師エュエル [ママ] の勧めによりキリスト教に近づき、明治二十一年長岡教会（越後）で受洗し、同年、綾部に戻った。留岡幸助と小塩の出会いは、この時期である。その頃、留岡は同志社

7　Simmons College. *The Department of Social Work*. Boston: Simmons College, 1915, p.8 を参照。初めて科学的解決策の重要性を全米慈善矯正会議会長のメアリー・E・リッチモンドが説いたのは、1897 年の年次大会がメリーランド州ボルチモア市で開かれた時である。貧困対策に携わる人々に対する「訓練をより専門的な基礎に置き、真剣な研究の対象とし、医学といった絶対的な基準に照らして、ある程度慈善事業を評価していくことが出来るはずである」と彼女は主張した。そしてリッチモンドは高等教育機関における 2 年間研修プログラムを提唱した。それによると、最初の一年間は社会事業一般について広く学び、続いて各専門分野についての知識を深めつつ実地訓練をほどこすべきなのであった。Alice Channing. “Early Years of a Pioneer School” *Social Service Review*. 38:4 (1954), 12, 430-440; Simmons College. School of Social Work. *75th Anniversary, A Retrospective on the Occasion of the Diamond Jubilee: An Historical Monograph*. Boston: Simmons College, 1980, p.6

神学校の業を終え、丹波第一教会牧師として丹波地方のキリスト教伝道に熱心であった。小塩は同二十五年に同志社神学校に入学し、宣教師ゴルドン等に学び二十八年に同校を卒業した。」その後、小塩は「ゴルドンの伝道を一時助けたり、上州倉野に教育塾（後に私立小中学校となる）の創立に尽瘁し、さらに上毛地方の教会牧師や前橋共愛女学校教頭の職に従事した。明治三十三年、小塩は留岡に乞われて留岡の運営する家庭学校教頭の任に就き、爾来終生を少年教護の事業に傾注した」のである。[8]

1903（明治 36）年小塩は「わが国の最初の公立感化院である薫育院（神奈川県）の院長となり、八年間をその教育に従事した。同四十三年春から四十五年春まで米国の感化事業や社会事業を視察し、実際にエルマイラ感化監獄に滞留するなどして、少年受刑者の処遇法や不定刑期の実際的運用を学んだ。四十五年春に帰朝するや、かれは家庭学校副校長の任に就き、留岡を助けて実際の教育的指導にあたり、家庭学校の充実発展に寄与した。」そして「大正十二年に家庭学校茅ヶ崎分校が設立されるや、小塩は茅ヶ崎に移り住み、昭和八年三月に茅ヶ崎分校が閉鎖されるまでの十年間をその管理運営に尽力した。分校開設直後に関東大震災に遭遇して分校施設倒壊の悲惨に遭遇したが、かれは東京家庭学校の経営を助け、北海道分校の財政管理にも参画している。」しかし、この茅ヶ崎分校が閉鎖されると、その「二ヶ月後の五月、小塩は家庭学校を辞し、同年十月に東京杉並に私財を投じて、茅ヶ崎分校と似たような小規模な教護事業『小塩塾』を創設した」と村山幸輝は述べている。[9]

小塩高恒に関する諸論考を公刊している小林（二井）仁美も簡単にアメリカ留学について触れている。[10] 小塩は「1903 年、留岡の命によって神奈川県立薫育院の『主席族長』を担当し、その後、アメリカ留学の機会を得た。そして、帰国後の 1912 年、『家庭』と『学校』を取り戻そうとしてい

8　村山幸輝「近代日本と感化教育 (一) 小塩高恒小伝」『四国学院大学論集』81 号 (1992), 1-38, 2-3 頁を参照。

9　村山「近代日本と感化教育 (一) 小塩高恒小伝」2-3 頁；村山幸輝「社会事業史における社会福祉思想　小塩高恒とその時代」『社会福祉実践の思想　嶋田啓一郎先生傘寿記念論文集』1989 年（下線は本稿の筆者による）；Toshiko Ito, “New Education for Underprivileged Children: The Codification of Children’s Rights in Japanese Law.” *Paedagogica Historica*. 48.1 (2012), 153-167 も参照。

10　小塩高恒の渡米経験を二井、遠藤、細井らは「留学」、室田は「遊学」という表現を用いているが、本稿では留学とした。

た巣鴨の家庭学校に戻り、1933 年まで教頭、副校長としての任務に携わった」と短く指摘している。[11] また『キリスト教社会福祉思想史の研究』において「小塩について伝記も自伝もないため不明な点が多い」[12] と指摘する室田保夫は「第四章　少年感化事業　家庭学校とその周辺」に「四　米国遊学をめぐって」と題する一節を設け、約 4 頁を割いて渡米に関する考察を行っているが「この渡米に関しても、小塩の決断が奈辺にあったか、あるいはその資金をどうしたのか等不明の点が多い」と結論付けている (同 280 頁)。[13]

同様の既述は細井勇や遠藤興一の論考にも見られる。細井によれば「小塩高恒は、1900 年創設まもない家庭学校に就職する。その後、1900 年感化法の施行に伴って開設された神奈川県立薫陶院に 1903 年就職した。その後小塩は、留岡に倣うかのようにして渡米、エルマイラ・リフォマトリーに住み込む。帰国した小塩は家庭学校に再就職、1933 年家庭学校を辞職、小塩塾を設立している。」[14] また遠藤は「1872 年、丹波綾部に生まれ、同志社神学科を卒業、その後は教員、牧師を経験し、1900 年 7 月、留岡幸助が設立してまもない児童保護施設、家庭学校の職員となった。その後は神奈川県立薫育院に転出、続いてアメリカに留学している。帰国後は家庭学校に戻り、副校長となって留岡を助けた。1923 年 1 月、神奈川県に茅ヶ崎分校を設立すると経営をまかされて、10 年間現場実践に取り組んだ」としている。[15]

Ⅱ

以上のように既存の研究は、小塩高恒による北米留学が、その後の福祉

11 小林（二井）仁美「家庭学校と小塩塾に関する考察　感化教育における『家庭』と『学校』」『教育学研究』58 巻 2 号（1991 年）132-141, 136 頁（下線は本稿の筆者による）。
12 室田『キリスト教社会福祉思想史の研究』、262 頁。
13 室田『キリスト教社会福祉思想史の研究』、280 頁。
14 細井勇「日露戦争後の感化救済事業とキリスト教」日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』（ミネルヴァ書房、2014 年）、100-123, 114 頁（下線は本稿の筆者による）。
15 遠藤興一「大正デモクラシー下のキリスト教社会事業」日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』（ミネルヴァ書房、2014 年）、124-152, 146 頁（下線は本稿の筆者による）。

実践において大切な結節点になっているとの認識を示しつつも、その詳細を明らかにしていない。従ってアメリカ視察において見聞した事柄を時系列的に並べ、歴史的文脈の中に置き直し、その意味を多少検討するだけでも一定の価値はあるものと認められよう。そこで、以下に『北米遊記』『人道』『斯民』といった公刊物や小塩の書簡、さらにアメリカ側の史資料を参照しつつ、その足跡を辿ってみたい。[16]

小塩高恒は、1910（明治 43）年 6 月単身渡米するにあたり、広く社会事業の研鑽のために海を渡る決意を留岡幸助に伝えていた。留岡はこれを『人道』第 63 号（1910 年 7 月 5 日）に「小塩静堂氏渡米」と題して以下のように記した。「今回薫育院を辞し、猛然志を起て米国に渉り、斯道の研究に従ふことになつた。今頃は既に米国に着いて居る時分である」と。続けて「君の志は単に慈善救済のことを研究せんとするのみではない。広く社会事業研鑽の功を積まんとするのである。」そして、過去において二度欧米留学を経験していた留岡は「セッセと早く見て、強く感じて、感興の失せない中に、帰朝して、帰来志を我国に布け。是れ実に我等同人の嘆望する處である」と結んでいる。[17]

続く『人道』第 64 号（1910 年 8 月 5 日）には「海外通信」と題して同年 6 月 19 日付けで日本郵船の丹波丸船中より留岡に宛てた書簡が掲載された。彼が横浜港で乗り込んだのは、当時 15 日間で太平洋を横断してカナダのビクトリアを経由してワシントン州シアトル港へ向かう船である。郵便物等を運搬する本船は明治 30（1897）年 10 月にスコットランドのグラスゴーのネイピア・シャンクス＆ベル社が建造した全長 139 メートルの大型貨物船であった。[18]　1910 年 6 月 8 日、本船は横浜港を出港した。[19] この書簡によると「拝啓、上陸に先だち一筆申入候、出帆の際は御多忙中遠路御見送り下され難有奉多謝候、海上頗る平静、近来稀なるナギの由に

16 既存の研究では情報源として『人道』誌が頻繁に引用されてきたが、『北米遊記』（中央報徳会、1915 年）ならびに『斯民』誌はほとんど言及されていない。なお、北海道家庭学校文書（書簡）資料番号 51413 は北海道教育大学の二井仁美氏より提供を受けた。記して感謝したい。明治 45 年 2 月 15 日記「ハドソン河畔の二大事業」『北米遊記』135 頁、明治 44 年 5 月 4 日記「落花片片」『北米遊記』171 頁、「昨年夏はエルマイラ、今年の夏はボストン」（『斯民』第 8 編 5 号）も参照。

17 留岡幸助による二度の渡米については、二井仁美「留岡幸助による欧米感化教育情報の収集」『日本の教育史学』47 巻（2004）88-108 頁；「留岡幸助による欧米監獄研究」『教育学研究』72 巻 3 号（2005）321-333 頁を参照。

て、お蔭にて至極壮健、一回も食事を休みたることなく（尤も節食いたし候得共）運動と睡眠とに大部分の時間を費し申候、剃刀の創も一回も生じ申さず候」といたって快適な船旅であったことを認める。続けて「同室のロシア人、名をオメリヤナツと申し候、純樸質実好人物にて、慥かに一世紀前の人物に有之、ワルソー在の農夫の由なれども、若し斯る性格がロシア人一般通有とせば、之を鉄砲にて殺すは惨酷の至りと存候、話が少しも通ぜず手真似のみにて、米英独の人間にも組ぬけに致され、只時々カラカワレ居れ申候」と、日露戦争後の時代背景を思わせる内容が綴られている。[20]

さらに『人道』第 64 号（1910 年 8 月 5 日）の記事「エルマイラより通信」によると、6 月 22 日に小塩はワシントン州シアトル港に到着して、高見秋吉らの世話になり、同月 25 日にシアトル市を出発して、大陸横断鉄道を使って同月 30 日ニューヨーク州エルマイラに到着した。到着翌朝には日本から持参した書簡を持って感化監獄の正門に立つにあたり、感慨無量であった旨を書き送っている。1910 年 7 月 2 日付けのエルマイラ感化監獄から留岡宛に出された書簡によると「昨 7 月 1 日朝与へられたる紹介状と托せられたる贈物とを携へ 2 哩半の道を電車にて参り漸く当感化監獄に

18 日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』（日本郵船、1988）；日本郵船歴史博物館の脇屋伯英氏から以下 3 点の資料提供を受けた。記して感謝したい。まず、日本郵船編『我社各航路の沿革』（日本郵船、1932 年）504 頁のシアトル（沙市）航路の箇所に明治 42 年 10 月より丹波丸がシアトル航路に就航していることが読み取れる。つぎに、新人物往来社編『復刻版明治大正時刻表』は明治大正時代の月刊『汽車汽船旅行案内』をまとめており、1912（大正元）年 9 月号に丹波丸の行程が記載されている。そして、日本郵船歴史博物館がデータベース化して管理している所蔵資料類において「丹波丸、乗客名簿、小塩高恒」で検索したところ「該当なし」との結果であった。その理由の一つに、おそらく一等・二等客室に乗船していないことが考えられる。

19 “Latest Shipping: Departures.” *The Japan Weekly Mail*. 11 June 1910, 899を参照。確かに “Passenger and Crew Lists of Vessels Arriving at Seattle, Washington, 1890-1957” National Archives and Records Administration, Washington, D.C. FHL microfilm 001454948 が 1910 年 6 月 8 日に横浜港を出港した丹波丸に小塩高恒が乗船しており、シアトル港に到着した旨記録している。本記録では、年齢が 37 才と 7 ヶ月、職業が教師、英語の読み書きが出来ること、保証人が父の小塩高志、目的地がマサチューセッツ州ボストンである旨記録されている。

20 “Passenger and Crew Lists of Vessels Arriving at Seattle, Washington, 1890-1957” National Archives and Records Administration, Washington, D.C. FHL microfilm 001454948 によると、ロシア人はウラジオストック出身の農夫 28 才既婚男性のユリゴリイ・オメリヤナツと記録されている。さらに、同乗者としてユミ・ハナキ（目的地がカリフォルニア州の静岡県出身 20 才と 6 ヶ月の既婚女性）、ヒラノ・タメ（目的地がカリフォルニア州の静岡県出身 27 才と 8 ヶ月の既婚女性）、イノ・テルジ（目的地がミシガン州の東京都出身 24 才の独身男性学生）が記録されている。

着仕候石段を上りつつ顧れば東海の男児 8 千哩を遠しとせずして此事業に就いて学ぶ処あらんが為めに遥に来たりて今此門に立つかと思へば無量の感慨に打たれ申候」その後、留岡の旧知である監獄長に面会し、滞米中の調査研究方法を直接教授してもらうために監獄職員室のひとつを間借りして住み込む手はずとなった。「刺を通じて総典獄スコツト氏に面会を求め其歓迎を受け申候貴殿の近状を殊に聞かれ申し候益々壮にして愈々多忙なる旨を答へ候処大に喜び居られ申し候喜んで研究の方法を講ずべしと云はれ如何様にすべきか総て同氏の指揮に従ふべき由申入れ其快諾を受けとにかくリフオメトリー内職員室の中の一室を借りてそこに住み込み申し候間御安心被下度候」と。[21]

こうして感化監獄の一角に住み込みの部屋を与えられた後、さっそく町に出てこれまた留岡の旧知でありエルマイラ感化院長を引退したゼブロン・ブロックウェーの自宅を訪問した。[22]「エルマイラより通信」によると、「それより町に下り西二丁目ブロツクウエー氏の宅を訪ひ申し候幸に在宅直ちに迎へ入れられ申候スコツトは年今真盛にして大兵肥満なる偉丈夫に有之候がブロツクウエー氏は早や年も老いたる事なれば頭は銅の如く髯銀に似たる温爾たる容顔以てよく来たと申され候」とある。対話の中で家庭学校の規模が小さいことに感銘を受けたブロックウェーは、日本からの来訪者である小塩に対して次々と質問を投げかけ、とくに少年救済の目的が個人・国家・神のいずれのためのものであるか、といった難しい問いを発したと記録している。「但し此翁中々一通ならぬ人間にていろいろ六かしき質問をなし申し候貴殿の此節身体肥満して公私の為に多端なる由申候処然るか然るかと喜び居られ候」そして「家庭学校の生徒 60 名程なりと申候にああ少ないかなと申され候又留岡君が彼等日本少年救済の為に『デヴオート』するのは何の為なるか少年彼等自身の為にか日本国家の為にかはた神の為にか如何と試験でもする如き口調にて質問に及ばれ候に付きそは多分三者凡ての為めなるべくと答へやり候」と。[23]

---

21 小塩高恒「エルマイラより通信」『人道』第 64 号（1910 年 8 月 5 日）。

22 エルマイラ感化院とブロックウェーについては、Zebulon R. Brockway, *Fifty Years of Prison Service*. New York: Charities Publication Committee, 1912; Anthony M. Platt. *The Child Savers: The Invention of Delinquency*. Chicago: University of Chicago Press, 1977, ch.3 を参照。

23 小塩「エルマイラより通信」『人道』第 64 号（1910 年 8 月 5 日）。

その後、ニューヨーク州から小塩は家庭学校機関誌『人道』や中央報徳会『斯民』誌に度々現地見聞報告を書き送った。なかでもエルマイラ感化院からの報告が多かった。室田保夫によれば、その理由はこの施設が1894年に留岡幸助が、1900年に生江孝之が訪れ研鑽を積んだところであり、「それだけその施設に期待するところが大であったのと、実際に実地において感動を受けてのことであったのだろう」と推測している。[24] たとえば明治43（1910）年9月5日の『人道』第65号「蝋のたれ　米国エルマイラにて」に続いて第66号（1910年10月5日）では「エルマイラリフオメトリーの現況（上）」と題して、その歴史、地理、経済、制度、教育、職員などについて詳しく紹介した。「抑々エルマイラ、リフオメトリーの事たるや邦人の耳に熟して斯界の士之の知らざるなし。然れども、エルマイラ感化監獄が不定刑期青年感化監獄の嚆矢として、其却下に於て猶ほ之が論難を怠らざるものありとせば、吾人が今茲にその現況を略記して、之が実状を報ぜんとするも、豈にまた無益の業なりと云はんや」と。

明治43年9月18日にエルマイラ発信と記された『北米遊記』掲載の「エルマイラの秋色」では「故国を出てより早や四ヶ月」（1頁）同年同月には「先日フリービルよりオーボルンへと赴きしが、フリービル少年自治団にては、少女家族の一なる『ニューヨーク、カテッジ』に宿泊、現総裁グリック氏並に紐育舎母グリーン夫人の優遇を受けて、一週日の間、自治自活の現況を実見せり」とある。「目下男子七十、女子六十名を収容し、いずれも十四歳以上二十一歳以下の青年少女にして、之を十棟の家族舎に住ましめ」とある。「この施設を一八九五年に創設したウ井リヤム、ジョージ氏は今や全国少年団協会の役員として全米各地に此種の事業を起す為に奔走して多忙を極め居れり。既にペンシルベニア、ワシントン、カリフオルニア、ニュージエルジー諸州に起し、来年はシカゴ及びセン、ロイスに創設せらるる由なり」と（6, 30-31頁）。このジョージ氏と共に9月16日にフリービル村で行われた共和党予備選挙を見聞しに出かけたとある（8頁）。[25] これに続

24『キリスト教社会福祉思想史の研究』、281頁；室田保夫「米国遊学時代の留岡幸助」『高野山大学論叢』17巻（1982）；生江孝之先生自叙伝刊行委員会編『わが九十年の生涯』1958年、33頁；二井「留岡幸助による欧米感化教育情報の収集」同「留岡幸助による欧米監獄研究」も参照。

25 これと同様の記述は「エルマイラ雑信」『人道』第69号（1911年1月5日）にも掲載されている。

けて明治 43 年 10 月 5 日、エルマイラ感化監獄の分監というべきナベノック感化監獄を視察に訪れた旨の記録を残している。この施設は 1900 年に設立された州立感化監獄で、エルマイラのスコット氏が総典獄を兼任している（22-24 頁）。[26]

『人道』第 67 号（1910 年 11 月 5 日）に掲載された「エルマイラリフオメトリーの現況（下）」では留岡の旧知であったブロックウェーやスコットの指導下で研鑽を積んだ様子が伺える。「さても当感化監獄内に居住すること満 16 週 112 日の間朝夕専門に相調べ候に付眼識の鈍き小生も今や全く大事より小事に至るまで感化監獄その物を獲得いたし候と信じ申候」と。

この記事を引用しつつ室田保夫は「渡米した年の 12 月まで 4 ヶ月」（282 頁）エルマイラ感化監獄に滞在したと記しているのだが、小塩の渡米は既述の通り 1910 年 6 月で、エルマイラ着が同月 30 日、当地での活動開始が 7 月 1 日と記録されている。したがって、当地を離れる直前の 12 月 18 日にブロックウェー宅を最後に訪問している事を考えると、5 ヵ月半の月日が経過していることになる。これはエルマイラ感化監獄を不在にしていた期間が 1 ヵ月半ほどあったということなのだろうか。そうであるならば、どこで何をしていたのだろうか。

さて、『人道』第 69 号（1911 年 1 月 5 日）に寄せた論考「エルマイラ雑信」に続いて第 70 号（1911 年 2 月 5 日）「エルマイラを去るに臨みて」では、1910 年 12 月ブロックウェー宅を最後に訪問した際、彼の主張してきた不定刑期論がようやく世界的に認められつつあることを記録している。「18 日ブロツクウエー翁最後の訪問をいたし候、同翁は万国監獄大会にて不定刑期議事の分課に臨み余程面白かりしと申され候、仏人中反対せし人もありかど最後の決議によりて不定刑期論初めて欧洲大陸人の容るる所となりたる次第に有之候」と。「同翁今は市長の職も辞して閑散の身に有之唯読書にのみ耽り居られ候、老夫人も壮健に御座候、娘々と云はるる人が既に 50 以上の老婦人に御座候て初め小生は之を夫人と間違ひ居り申候、「ワシントンにて日本の紳士がオー、ブロツクウエー氏留岡君が云々と話したり日本人は予を見れば留岡君を連想する如し」と申され候に付き、実に日

26「（十一）ナノベック感化監獄」『人道』第 67 号（1910 年 11 月 5 日）も参照。

本に貴翁を紹介せしは留岡氏に外ならずと答へ候処余程満悦の体に見え申候。」

そして「エルマイラを去るに臨みて」の最後では、ブロックウェーとの惜別を感情的に綴っている。「日本へ帰りてから電話にて話が出来ぬかなどなど戯れおられしが、さて告別、否訣別に臨んで翁は双手にて小生を握りしめ前途を祝され申候殊に我が留岡（To my Tomeoka）には予が生前に是非今一度来米するやう勧めてくれよと繰返され、科学的にして宗教的にあらざる此偉丈夫の眼底のやや露を含めるを見て覚えず暗涙を催し、此宗教的ならざる老紳士か今日殊に霊生の不朽に就いて論ずる所ありしは何等かのオーメンにあらざるか、とにかく小生は再び此翁と見ゆる時なかるべしと感じ、いとど哀しみを覚えて辞し申候」と。

こうして名残惜しくエルマイラを去った翌日の夜、小塩はボストンに到着し、隣町ケンブリッジに居を構えることとなる。『人道』第 71 号（1911 年 3 月 5 日）によると、当地に到着するとまず 1911（明治 44）年の 6 月にボストンで開催が予定されている全国感化救済事業大会、全国監視吏員大会、特殊児童教育全国大会への出席を予約した。

1911（明治 44）年 1 月になると「新年を機として大いに覚醒し、一層深き観察をなさんが為に友人西浦氏の好意によりて田舎巡りを思立ち、オバーコートとオバーシユウスに身を固めてマサチユーセッツの町村を行脚すべく、耳を劈く朔風を冒して先づコンコルドへ向へり」「コンコルドに在るや、感化監獄門前のステーションに鄰れるホテルに居を定め、朝夕出入りして丁寧にその実状を調査し、典獄ベーカー氏とリーランド氏の懇篤なる指導を受けたり」とある。[27]

『北米遊記』「コンコルド感化監獄」によると、コンコード感化監獄においてスコット氏の跡を継いだ「典獄アルバー、ベーカー氏は謙虚純朴の士なり、エルマイラにスコット氏が適せる如く、当所に同氏は極めて適任なりと認めらる」という。「当感化監獄の基礎は何に在りやとの問に対して『我が主義は多くの犯罪人はもし之に適当なる訓練を受くる機会を與ふれば必ず改善するの能力と希望とを有する者なりとの新工場の上に立つ』と答へられる」とし、「『くろがねの的射し人もあるものを』とは今上陛下の

27『北米遊記』46-47 頁。

御製に非ずや。日本囚人改善の業、もしくは感化事業に当たるものは、先ず其の可能を信じて努力すべし、成らざるは其の罪己に在り」と結論づけた（53-55 頁）。[28]

なかでもコンコード感化監獄における処遇法に注目し「犯罪の原因に遡りて之を探求し、その理性を高めて合理の方法によりて向上せしむるが故に之を科学的といふ得べく、囚人を隔離保護すること比較的短時日（平均一人十四箇月）なるが故に国家の負担を減少すべく、之が改善を完成して世に出すが故に再犯者の数を減少すべく、依りて之を経済的といふを得べし」と（56-57 頁）。さらに図書館と週刊誌の存在にも注目している。「教場、礼拝、学友会以外その智徳を鍛錬修養せしむる機会は図書館とアワー、ペーパーなり、参考となるべき良書は絶へず加へられ閲覧に供す。アワー、ペーパーはエルマイラのサムマリーと相似たる囚人の為めに発行する十六ページの週刊雑誌なり、毎日曜の説教講演は必ず悉く筆記して毎号掲載し、其他雑録物語等の諸欄概してサムマリーよりも道徳的なり。彼には政治的時事論あり、世界の大勢に明らかならしむ」と（64-65 頁）。

そしてコンコードを去る前日の 1911（明治 44）年 1 月 14 日、スリーピーホロー墓地を訪れている。[29] 翌日付「仙骨在玆偉人の墓」『人道』第 71 号（1911 年 3 月 5 日）によると、コンコードにあるエマソン、ホーソーン、チャニングⅡ世の墓に詣でている。「乃ち手帖の紙を引きちぎり、ウオーターマン製の矢立を取り出して、チヤニング第二世の墓前には「家庭学校長留岡幸助代理小塩高恒」と清書せるを置き、エマルソン先生の石には「明治四十四年春一月謹んで先生ならびに令夫人の墓に詣でて感興を受く。生は是れ日東の男子、塵の世を浄めんが為に塵の中に入りて努力するもの、しかも永遠に亙るべき深遠の境に逍遥せんが為に判らぬながら先生の遺訓を学ぶもの、永く此日を記念すべし。小塩高恒謹白」と書きつけ、ホーソルンの垣に結びつけたる紙には「本月本日君の墓に謁して、謹んで君の知らざりし古今和歌集を供す。日本文連の隆昌を祈りて静堂学人再拝」との語を録し、終はり顧みれば暮色蒼然として四辺より蔽ひ来り、三十エーカルの墓地人の子一人も見えず低き彼方に穴掘り男がシガーをくゆらすの

28 これと同様の記述は「コンコルド感化院」『人道』第 71 号 1911（明治 44）年 3 月 5 日にも掲載されている。
29「仙骨在玆偉人の墓」『北米遊記』48-51 頁；『人道』第 71 号 1911 年 3 月 5 日 10 頁。

と、高き丘上に小生が立てるのと寒風枯木を掠め颯々たるとばかりに御座候。ねぐらに帰る晩鴉は無是候唯栗鼠の忙しげに飛び走るを見るのみに御座候」。そして、1911（明治 44）年 1 月 15 日「小生はメーナードに移るべく獄吏に別を告げ再来を約し此［コンコルド］村を後にした」とある。[30]

さて、1911（明治 44）年 2 月に小塩はマサチューセッツ州西部を「會遊」している。『人道』第 75 号に掲載された「ボストンたより」によると、感化院視察という専門的な目的以外でも積極的に各地を訪れている。たとえば母校設立者である新島襄の足跡を辿った様子が次のように記されている。「先月は歴史に因み深きコンコルド近辺より転じて遥か西の方に飛び申候、此行の視察は悉く専門以外にしてアムモスト大学に先ず故新島先生曾遊の跡を偲び申候、先生の像は立派なる者に有之此此る人が来たり学びたる事を以て該校の名誉といたしをり候、小生は此の如く尊敬せらるる人の起こりたるを名誉と存候」と。「メレーライオンの遺業を初めとして規模小なる女カレツチは此邊に二三箇所有之候、大なるはノーサムプトンのスミス、カレツチに御座候」。さらにノーサンプトンでは種々の社会事業施設の見学も行なった。「ノーサムプトンには唖学校あり癲狂院あり共に見るに足るものに御座候」とある。[31]

事実、監獄を含む社会事業諸施設に限定しないで、できるだけ見聞を広めたいという意思が小塩には認められる。この点については『斯民』第 6 巻 1 号（1911 年 4 月 7 日）で以下のように述べている。「出来得る限り時間を利用して、目的遂行に努力いたし度のみならず、かくすることにより口によりて、卑しき方面のみを知る人あり、紳士や学校のみを知れる人あり、『インスチチユーシヨン』のみを知る人あり、各完璧に無御座候。小生は出来得る限り、日本人の居らざる田舎に行き、又かかる田舎にまで滔々たる移民の増加せる現状を見、更に進んで暗黒面をも見居申候。願はくば小生をして盾の両面から探らしめよ。浅薄にして軽率なる小生の分相応に、其一端を察するつもりに御座候」と。

1911（明治 44）年 3 月初旬にはボストンへ戻り、4 日の朝には州庁舎

30 同様の記述が『北米遊記』52-53 頁にもある。

31 メアリー・ライオン（Mary Lyon）は、19 世紀における女子教育の先駆者で、1834 年にウィートン女子神学校（現在の Wheaton College）、1837 年にマウントホリヨーク女子神学校（現在の Mt. Holyoke College）を創始した人物である。

にて獄務長「(或は監獄局長と云ふべきか)。プリズン、コミツテチーフのチエーアマンに有之候」に対して州内の獄事に関する調査案内と助言を依頼している。その成果が実り、3 月 7 日には浮浪少年孤児棄児救済施設 5 箇所を巡回、翌 8 日にはチャールスタウンの州立監獄を視察、その後 2 日間は救世軍の諸事業を見学している。[32]

続いて 3 月 20 日にはボストン郊外の「跛児畸児実業学校を視察した」とある。「知音」『人道』第 75 号（1911 年 7 月 5 日）によると「之は近来自分が見物したものの中に於いて最も感じたものの一であつた。校長はメリー、エム、ベルリーといつて、恰好なる年輩の婦人である。」「例の米国式愛嬌を湛へて、盛んに自分の来訪したことを喜ぶといふやうなこと巧みに吹聴する。吹聴するといへば、此の事業はボストンの名誉であるといふやうな気焔を惜気もなく吹聴されたので、さればで候、其の盛名を聞きたければこそ、東海の遊子、ボストンに来ると、逸早く拝見に罷出た訳にて候とやつて退けると、夫れはたわいもない子供の様に喜んで、待遇亦一通りじゃない。何處迄も米国式に出来て居ると、先ず此事を感心する」と。そして「実験は事実の生まれる所である。自分等もどうか犯罪学ラボラトリー不良少年ラボラトリーの完全なるものを設けたいと、豫の宿意を今更益々切に感じた訳である」。[33]

1911（明治 44）年 5 月はニュートンに（『北米遊記』74 頁)、6 月はロックスベリーに（『北米遊記』79 頁)、7 月は再びニュートンに居を移している（『北米遊記』113 頁)。この間、ボストン市の西端ウェストエンド地区チェンバースにある「女子殖民館」を視察に行った（「女子殖民館」『北米遊記』95-6 頁)。また 7 月 4 日の独立記念日にニュートンより約 10 里西にあるサウスフラミンガム女子感化監獄を訪れた（『北米遊記』112-113、123- 頁)。[34] 同年の後半は、主にボストンに居を構え、女子感化監獄、少年自治団などを精力的に視察して回っている。

年が明けて 1912（明治 45）年 1 月には全米最大の少年倶楽部を視察する目的でフォールリバーを訪れ、当地滞在中の 1 月 11 日にハーバード大

32「ボストンたより」『人道』第 75 号（1911 年 7 月 5 日)。
33「跛兒の實業學校」『北米遊記』79 頁；1911（明治 44）年 3 月 20 日付け「跛兒の實業學校」於ボストン『人道』第 75 号 1911（明治 44）年 7 月 5 日 10-11 頁、『北米遊記』80、82 頁も参照。
34 明治 44 年 7 月 15 日付「米國模範女子感化監獄の今昔」於ボストン『北米遊記』117 頁も参照。

学在学中のジョージ・ケーリ（同志社大学オーティス・ケーリ教授の叔父）から手紙でケンブリッジ市に呼び戻されている。[35] 翌 2 月は、ボストンを中心に種々の慈善事業を視察し、その後ニューヨーク州へ移動し、少年感化院、女子感化院、実業学校などの視察を続けた。[36]

帰朝直前の小塩高恒にインタビューしたアメリカの慈恵救済事業関連雑誌『サーベイ』誌は、明治末期「日本人の米國觀」と題した記事を 1912 年 4 月 20 日号に掲載した。[37] これを小塩自身が『北米遊記』に全訳している（215-221 頁）。さらに翌 1913 年にはカナダのオンタリオ州第 7 報告書が同様のインタビュー内容を簡潔にまとめている。「日本からの訪問者である小塩高恒は、アメリカの感化院を調査研究した 2 年間の滞在を終えるに当たり、我々に対してアメリカに関する意見を提供してくれた。いわく『アメリカは大き過ぎ、忙しすぎ、騒々し過ぎた』と。ある意味において、この日本人紳士はアメリカが日本のはるか先を走っていると考えていた。しかし、精神を病んでいる人々に関しては必ずしもそうではない。例えば少年少女が感化院に入れられると、感化院の医師がいかなる精神的な欠陥があるのかを診断し、是である場合には精神病院送りとなってしまう。確かに日本における不良少年少女には精神的にどこかしら欠けている部分があるかもしれない。我々カナダにおいても同様のことが言えまいか」と。[38]

1912（明治 45）年 4 月 5 日の『人道』第 84 号には小塩の「帰朝仕候」という報告が掲載されている。その翌月『人道』第 85 号（1912 年 5 月 5 日）には同年 2 月 26 日付けの書簡「シヤートルの救済事業」で、「明日は弥々夢寐忘るる能はざる故国へ帰らふと思ふ。併し帰るに先だちて、自分は最後の報道をして置かねばならぬ。之を書いて仕舞えば、自分はモー船に乗

35「米國最大の少年倶樂部」『北米遊記』84 頁、「新聞小僧倶樂部」『北米遊記』90 頁。

36 State of New York. *Sixty-First Annual Report of the New York Juvenile Asylum for the Year 1912*. Transmitted to the Legislature, January 28, 1913. Albany, NY: J. B. Lyon, 1913 によると、“Other friends of the School and representatives from kindred institutions who visited us were: ... Mr. Takahisa Oshio, Tokyo, Japan ...” (p. 9) とある。同様の記述は、*The Children's Village and Other Activities of the New York Juvenile Asylum, Dobbs Ferry, N.Y. Sixty-First Annual Report for the Year 1912*. New York: New York Juvenile Asylum, 1913　の 23 頁にもある。

37 “A Japanese View of Our Reformatories.” *The Survey: Social, Charitable, Civic: A Journal of Constructive Philanthropy*. (20 April 1912), 118-119.

38 “Japan” *Feeble Minded in Ontario Seventh Report for the Year, 1913*. London, 1913, ed. Helen Macmurchy. London: Forgotten Books, 2013, 49-50.

りさへすればよいのである。俟ち焦るる日本よ、汝に見ゆることも、程近くなつた。世話になった米国よ、汝の将来も多望である。イザ別れに臨んで、お前のことを、今少し書いて置かう」と記している。

本書簡はワシントン州シアトルにおける社会事業、少年裁判所、障害児病院、感化院、感化監獄、在留日本人教会活動などを報じた上で、以下のように結んでいる。「米国へ来てから、丁度二年、此の間色々見もし、聞きもした。其見聞が広いか、狭いか、深いか、浅いか、夫れは分からぬが、兎も角自分は有益に且つ多忙に此の二年間を送つた。」つづけて「即ち明日故国に帰らうといふ今晩迄、視察の日程を歩だことは、省みて聊か満足する所である。シヤートルの記事も之れで終わりを告げる。夫れと同時に、僕の米国に居ることも、之れで終わりを告げるのである」とやや感傷的な記述である。

ところで、1912（明治 45）年 3 月にシアトルから横浜港へ航行したのは日本郵船所有の丹波丸と讃岐丸である。前者は 3 月 4 日に横浜に到着していることから判断して、これに小塩が乗船していた可能性は極めて低い。[39] 一方、讃岐丸は 1911（明治 44）年からシアトル航路に就航した大型貨物船で、1912 年 3 月 18 日に横浜港に戻った記録が残されている。[40] 新人物往来社編『復刻版明治大正時刻表』に掲載されている月刊『汽車汽船旅行案内』の 1912（大正元）年 9 月号に讃岐丸の行程が記載されている（191 頁）。それによると、シアトルから横浜まで 17 日かかっており、このことから考えると、小塩がシアトルを出たのは 2 月 27 日ではなく、3 月 1 日ではないかと推測される。

Ⅲ

こうして 1912（明治 45）年 3 月 18 日、1 年と 9 ヶ月にわたる北米視察を終えて小塩は日本に帰国し、家庭学校に再度就職することになる。彼

39 “Latest Shipping: Arrivals.” *The Japan Weekly Mail*. 9 March 1912, 307.

40 日本郵船編『我社各航路の沿革』（日本郵船、1932年）504頁；“Latest Shipping: Arrivals.” *The Japan Weekly Mail*. 23 March 1912, 367. なお、本船の 1・2・3 等客室に乗船していた客の固有名詞が名簿にあるが、それ以外は 12 名の日本人と 2 名のロシア人が乗船していたと記録されている。“Passengers: Arrived.” ibid., 367.

を迎える留岡幸助は『人道』第 85 号（1912 年 5 月 5 日）に「小塩君を迎ふ」と題して、次のように記している。「慈善事業現下の形勢に鑑み、慨然外遊の志を立て、乃ち二年前薫育院を辞して、足をあげ踏海千里遠く米国に渡り、エルマイラ、コンコルド、両感化院を中心として米国著名の救済事業の現状を視察し、且つ斯道の大家に就きて、親しく其蘊奥を敲き、頗る啓発する所あり」と。

ここで問題となるのは、なぜ小塩が北米視察にでかけたのか、さらにこうした視察がいかなる意味をもったのか、という点であろう。第一の点については、村山幸輝が留岡の影響に加えて、小塩による欧米事情の翻訳活動があっただろう、と推測している。「小塩高恒は家庭学校機関誌『人道』に、明治 40 年 1 月から 42 年 1 月にかけて、毎号のように教育事業や病院事業、社会的救済事業に従事した欧米の人物伝を掲載した。その後、明治 43 年に神奈川県薫育院を辞し、同年 6 月から 45 年 3 月にかけてアメリカに遊学し多くを学んだ。」[41]　続けて「小塩の北米遊学の動機は、留岡らの勧めもあったであろう。しかし、かれの渡米の直接的動機は、社会的救済事業や非行少年に関する欧米の著書を翻訳することによって、欧米の教化事業の実際に高い関心を寄せたからであろう。留岡も北海道空知集知監監獄教誨師時代（明治 20 年代）に、エルマイラ感化監獄などの様子を欧米文献を通して知り、その処遇内容を手本として監獄改良に努めた。かれは教誨師辞職後、アメリカに渡り多くを学んでいる。」[42]

また北米視察の意味について室田保夫は「小塩にとって異文化の体験に止まらず、その後の彼の社会事業実践、そして人生において極めて有意義な経験であったことは言うをまたないことである。とりわけ留岡の片腕として家庭学校の運営に、そして日本の社会事業の発展に大きく役立ったことと思われる」と指摘し、「明治国家が激しく動揺したその末期に、小塩は『文明国』米国社会の実相を客観的に観察し、異国での体験から新しい国日本への忠告をなしている」と結論付けている。その一例として在米中に『斯民』第 6 巻 7 号（1911 年 10 月 7 日）に寄せた「日本の慈善事業家をして研究心を熾んならしめよ」を引いている。「日本の慈善事業家は、

41 村山幸輝「近代日本と感化教育 (三) 小塩高恒の近代化論」『四国学院大学論集』84 号 (19), 1-20, 8 頁。
42 村山、10 頁（下線は本稿の筆者による）。

余りに実験を貴びて研究を怠るは如何と思ふ。彼等が学理的研究は皆無に非ずや。実験素より可なり、大に必要なり。されど貧しき頭脳の空なる実験は組織的になり居らざるなり」と論じた点を挙げている。[43]

続けて同誌において「当世の社会事業家をして先ず大に勉強せしめよ。新時代の潮流を知らしめよ。而して是に加ふるに実験を以てせしめよ。正しき科学的智見によりて成せる失敗は科学的に恢復するを得べし。頑冥なる実験家の失敗は施すに由なし。」と小塩は主張する。さらに「今日我邦の慈善事業はまだ少年時代に非ずや。正しき方法によりてならば、失敗しても可なる時代ならずや。老成の境に非るなり。矢鱈に老成頑冥なるが故に識者の侮を受け、世の誤解を招き、時には人の擯斥をすら受くることあるにあらずや。吾人をして真乎に慈善事業の大成を企図するに当りて『世の誤解を弁ず』といふ如き事に余分の骨を折らしむる事あるやも知れず、その罪果たして誰に在りや」と。[44] これは小塩高恒が北米留学した時代のアメリカにおける科学的指向の影響だろう。事実、デイビッド・アンバラスが指摘している通り、この時代の慈善活動はキリスト教博愛主義から科学的実践へと変化していく真っ只中にあった。[45]

このような問題意識が、その後の活動にいかなる影響を及ぼしたのだろうか。この点については、小林仁美が整理している。「留学後の研究にも小塩の基本姿勢は継承され、家庭教育の関心からアメリカの女子監獄を積極的に視察した」。さらにエルマイラ感化監獄について実地見聞を深めた結果、「離婚の多きことが不良少年を発生する原因中の一」であると考え、帰朝直後に翻訳出版される『不良少年』の著者「モリソンが指摘した「家庭破綻」の重さを確認し」続けて執筆出版する「『家庭の覚醒』『社会の覚醒』などの書物にも著された」と。[46] 家庭と学校と女子教育というつながりは、『人道』に日本女子大学創設者成瀬仁蔵、麻生正蔵、浮田和民らが寄稿しているといった人脈からも窺い知ることができようか。

さらに小塩高恒が北米留学した時期は、冒頭でも述べたとおり、「革新

43 室田、62 頁。
44 室田、62-3 頁。
45 David R. Ambaras. “Social Knowledge, Cultural Capital, and the New Middle Class in Japan, 1895-1912.” *Journal of Japanese Studies*. 24.1 (1998), 1-33, 16.
46「家庭学校と小塩塾に関する考察」139 頁。小塩高恒「観光雑筆」『人道』77 号（1911 年 9 月 5 日）ならびに 1911（明治 44）年 7 月 4 日付「観光雑筆」於ニュートン『北米遊記』107 頁も参照。

主義（progressivism）の時代」と呼ばれ、19 世紀後半の自由放任主義を見直し、政府による科学的で合理的な介入を容認する風潮が強まっていた。その背景にあったのが、大規模な社会的変化であった。すなわち都市化と大量の（南・東ヨーロッパからの）新移民流入、そして社会秩序崩壊への危機感である。こうした社会不安への対応として生まれたのが、バリー・クリスバーグとジェームズ・オースチンによれば「不定期刑の広範な利用、公設弁護人運動、警察を専門化する努力の始まり、精神鑑定と知能テストの出現、犯罪についての科学的な研究、そして究極的に少年裁判所という革新的なこと」であった。[47] ここで注目すべきは、19 世紀後半に登場した児童救済運動家として知られる社会改革集団である。彼らは少年非行防止を目的とした少年保護施設に異議を唱え、長期の施設内保護よりも家庭生活の方が優れているという伝統的な考え方を抱いていたのである。そこでは、例えば浮浪や貧困の子供たちは西部辺境の農家に送られ、里親のもとで非行が解決されるだろうという楽観主義が、家庭こそ暖かく道徳的な場であるという伝統的価値観によって支えられていたと言えよう。これと並行して、都市の少年保護施設を田園地帯に移転させ、小舎制（cottage system）に基づく農業労働に従事させることで改善を図ろうとした。さらに、施設内部で在院者による自治制を促進することも試みられた。小塩も視察したジョージ少年共和国は、みずから民主主義を構築することを旨としたが、それはクリスバーグとオースティンによる修正主義批判によれば「少数の支配を指向する職員の意に合致する限りにおいてであった」。[48]

こうした修正主義批判、すなわち社会の上位階層による下位階層統制とみるならば、自らの階級的立場の権益を守ろうとする限られた改革運動として消極的評価を下すことになる。これに対して、より伝統的あるいは正統派の論者達は、徳岡が指摘しているとおり、少年刑事政策の歴史的変遷を偉大な改革的進歩だと高く評価する。「身体刑から自由刑へ、少年のための矯正施設へ、少年のための司法制度へという変化は、野蛮な体罰、監獄・刑務所・少年施設の悲惨な状態などを憂慮した人道的博愛主義者や宗教的改革者たちの、私心のない努力によってもたらされた」

47 バリー・クリスバーグ、ジェームズ・オースチン（渡辺則芳訳）『アメリカ少年司法の再生』（敬文堂、1996 年）、38-39 頁。
48 クリスバーグ、オースチン、40 頁。

というわけである。[49] これは小塩高恒が「泰西之博愛家」で描いていた像に一致しようか。例えば二井は「感化院ではなく、篤志家がみずからの家庭に子どもを預かり育てるシステムに対する共感を生む。家庭の機能を喪失した家庭から切り離すが、ふたたび家庭の成員となるように子どもを本当に育てる方法を模索」したと主張する。[50]

明治末期に渡米し、慈恵救済事業から人情風俗に至るまでを観察した小塩高恒が抱いた対米観は、日露戦争後に緊張感が高まる日米関係にあって、排米にも拝米にも偏らない醒めた目であった。それは、二井、室田、村山、細井、遠藤らの研究が明らかにしたように、帰朝後に慈恵救済事業である家庭学校副校長として、その後は家庭学校から独立した小塩塾の塾長として働く際、実際的知識として活きてくるのである。[51] とくに注目すべきは、以下の 2 点であろう。第一に、小塩が大学に所属するのではなく、教護施設に泊まり込む等して、いわば頭脳ではなく身体で学んだところである。[52] 第二に、慈恵救済事業先進国とされているアメリカの事情を一方的に受容したというよりも、時としてこれを批判的にみて、選択的に受容したと思われる。慈善の心をもって人間の成長を信じ、科学的合理性に基づき社会変化に対応している状況を高く評価しながらも、事業規模の大きさからくる対人間の希薄性を強く問題視していた。これは、家庭的少人数の実践を

---

49 徳岡秀雄『少年司法政策の社会学』（東京大学出版会、1993 年）、97 頁；服部朗『アメリカ少年法の動態』（成文堂、2014 年）も参照。

50 二井『家庭学校と小塩塾に関する考察』139 頁。

51 明治 44 年 5 月 4 日付「米国ボストンより《其一》」『斯民』第 6 編 3 号（1911 年 6 月 7 日）、同日付「《其二》」同号、5 月 31 日付「婦人を先にせよ」『斯民』第 6 編 4 号（1911 年 7 月 7 日）、同日付「面白き張札」同号、6 月 1 日付「盛なる広告術」同号、「米国ボストンより」『斯民』第 6 編 5 号（1911 年 8 月 7 日）、8 月 7 日付「寒暑に弱き白人」『斯民』第 6 編 6 号（1911 年 9 月 7 日）、「米国ボストンで迎へし去年の正月」『斯民』第 7 編 11 号、「米国に於ける夏期の追憶」『斯民』第 8 編 5 号（「米國に於ける夏期の經驗」『北米遊記』194 頁）、「西洋赤毛布」『斯民』第 9 編 3 号（「西洋赤毛布」『北米遊記』208 頁）などは、明治末期日本人の対米社会観を考察するにあたって大変興味深い材料である。紙面の都合上、本稿において敢えて取り上げる事をしなかった。

52 太田愛人は「蘖の根を求めて　小塩高恒の仕事」『天に宝を積んだ人びと　明治キリスト教者の気骨』（キリスト教新聞社、2005 年）、7 － 91 頁において、小塩が「渡米し、三年間、ボストン大学で学ぶ」（49 頁）「ボストンで心理学を学ぶ」（57 頁）と記しているが、本稿執筆の時点で同大学に在籍していたという確認は取れていない。

* 草稿を読んで下さった明石紀雄先生、調査執筆を可能にして下さった David Hall 先生をはじめ History of American Civilization, Harvard University、ancestry.com をご紹介下さった飯島真理子先生に感謝したい。すべての誤りは筆者の責任である。

試みようと考えて帰朝後設立した小塩塾に反映されている。つまり、規模の面で言えば、アメリカ大西部の農家（日本の場合であれば、留岡の北海道における大規模農園）に少年を送るのではなく、家庭農園といった小規模な形で土と触れ合うことを良しとする考えを持ち帰ったのである。

北米遊記日程

年	月	日	場所	事項	情報源
1910	6			社会事業研鑽を目的とする単身渡米	「小塩靜堂氏渡米」人道 63 号（1910 年 7 月 5 日）
1910	6	8	横浜港	日本郵船（貨物船）丹波丸に乗船・出国	「海外通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）Japan Weekly Mail 11 June 1910
1910	6	19	太平洋上船中	健康健啖、ロシア人との出会い	「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	6	22	西海岸ワシントン州シアトル市着	高見秋吉が世話	「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	6	25	シアトル発		「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	6	30	東海岸ニューヨーク州エルマイラ着		「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	7	1	エルマイラ	エルマイラ・リフォーメトリー初訪問、スコット氏面会	「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	7	2	エルマイラ	エルマイラ・リフォーメトリーから書簡送付	「エルマイラより通信」人道 64 号（1910 年 8 月 5 日）
1910	8	15	エルマイラ	ナイチンゲール死亡の報に接する	「ナイチンゲール嬢死して満二年」人道 89 号（1915 年 9 月 15 日）『家庭之覚醒』167 頁
1910	9	16	ニューヨーク州フリービル	フリービル少年団、オーボルン監獄、リハイバレー	「エルマイラ雑信」人道 69 号（1911 年 1 月 5 日）北米遊記 8 頁
1910	9	18	エルマイラ	エルマイラ監獄	「エルマイラ雑信」人道 69 号（1911 年 1 月 5 日）北米遊記 9 頁
1910	9	21	エルマイラ	エルマイラ雑信	「エルマイラ雑信」人道 69 号（1911 年 1 月 5 日）
1910	9		ナベノック	ナベノック感化監獄視察	「ナノベック感化監獄」人道 67 号（1910 年 11 月 5 日）北米遊記 23 頁
1910	9		エルマイラからイサカ経由でフリービルへ	フリービル紐葡舎	「フリービルの別天地」人道 100 号（1916 年 8 月 15 日）北米遊記 28-29 頁
1910	10	5	エルマイラ	エルマイラ監獄	「エルマイラ感化監獄の現況」「見聞数則」北米遊記 25 頁、117 頁
1910	12	18	エルマイラ	ブロックウェー氏最後の訪問	「エルマイラを去るに臨みて」人道 70 号（1911 年 2 月 5 日）
1910	12	19	エルマイラ発、マサチューセッツ州ボストン着	ケンブリッジに宿所を取る	室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究』（不二出版、1994 年）282 頁
1911	1		ボストン	西浦氏の好意により田舎巡り	「仙骨在茲偉人之墓」北米遊記 46-47 頁
1911	1		コンコード感化監獄門前の駅に隣接するホテル	典獄ベーカー氏、リーランド氏の指導を受ける	「仙骨在茲偉人之墓」北米遊記 47 頁

年	月	日	場所	事項	情報源
1911	1	14	コンコード	スリーピーホロー墓地訪問	「仙骨在茲偉人之墓」人道 71 号（1911 年 3 月 5 日）北米遊記 48-53 頁
1911	1	15	コンコードからメーナードへ	獄吏と別離、寒村コンコードの南 3 里半の人口 6 千の町へ	「仙骨在茲偉人之墓」人道 71 号（1911 年 3 月 5 日）北米遊記 52 頁
1911	1	20	メーナードからボストンへ	米国ボストンより	「米国ボストンより」斯民第 6 編 1 号（1911.4.7）
1911	2	8	ボストン	ボストン発スプリングフィールドへ	「米国ボストンより」斯民第 6 編 1 号（1911.4.7）
1911	2		マサチューセッツ州西部地域	アマスト大学、ノーサンプトン唖学校、狂院視察	「ボストンたより▲新島先生会遊の跡」人道 75 号（1911 年 7 月 5 日）、北米遊記 165-7 頁
1911	3		ボストン	サウスフレミンガム（シューボルン）州立女子感化監獄 17 日間通い視察	「米国模範女子感化監獄の今昔」北米遊記 118-119 頁
1911	3	4	ボストン	州監獄局長ペテグローブ氏面談	「ボストンめぐり」北米遊記 167 頁
1911	3	7	ボストン	不老少年、孤児、跛児救済施設五箇所視察	「ボストンめぐり」北米遊記 168-169 頁
1911	3	8	ボストン	チャールスタウン州立監獄視察	「ボストンめぐり」北米遊記 169-170 頁
1911	3	9	ボストン	救世軍事業など視察	「ボストンめぐり」北米遊記 171 頁
1911	3	10	ボストン	天主教慈善事業など視察	「ボストンめぐり」北米遊記 171 頁
1911	3	17	ボストン市郊外ニュートン村	ボストンから書簡送付	「海外通信◎ボストンたより」人道 75 号（1911 年 7 月 5 日）北米遊記 171 頁
1911	3	20	ボストン	ボストン郊外の跛児実業学校視察	「跛児の実業学校」北米遊記 79、84 頁、人道 75 号（1911 年 7 月 5 日）
1911	5		ニュートン村	シェフィールド市々風改善倶楽部	斯民第 7 編 4 号（大会記念新潟号）北米遊記 74 頁
1911	5	4	ボストン	日本人の体格	「落花片々」北米遊記 173 頁
1911	5	30	ボストン	デコレーションデーのため市内墓地巡遊	「婦人を先にせよ」北米遊記 175 頁、199 頁
1911	5	31	ボストン	張札	「面白き張札」斯民第 6 編 4 号（19111.7.7）北米遊記 175、199 頁
1911	6	1	ボストン市ロックスベリー地区	ニューブリテン美市団の活動、盛なる広告術	「米国ニューブリテンの美市団の活動」斯民第 6 編 4 号（1911.7.7）北米遊記 79 頁
1911	6	7	ボストン	慈善大会開催参加	「吾人究極の目的」北米遊記 178 頁
1911	7	4	ニュートン村	サウスフレミンガム州立女子感化監獄	「観光雑筆」北米遊記 113 頁
1911	7	15	ボストン	米国模範女子感化監獄の今昔	「研究」人道 87 号（1912 年 7 月 15 日）北米遊記 134 頁
1911	8	7	ボストン市ロックスベリー地区	ブロックライン夏期公園視察	「寒暑に弱き白人」斯民第 6 編 6 号（1911.9.7）
1911	8	16	ボストン	東郷代将軍南停車場着、万歳連呼	北米遊記 205 頁、「東郷大将来」斯民第 8 編 5 号
1911	9		ニューヨーク州フリービルからオーボルンへ	一週間フリービル少年自治団を視察	「社会」人道 78 号（1911 年 10 月 5 日）北米遊記 2 頁
1911	9	2		「日本をして先登の名誉を得せしむる道は唯一あるのみ」	北米遊記 181-182 頁、斯民第 6 編 7 号（1911.10.7）
1911	9	26	ベッドフォード	ブロックトン共進会視察	「ブロツクトンの共進会」北米遊記 158-159 頁

24　小塩和人

年	月	日	場所	事項	情報源
1911	10	12	ボストン市ロックスベリー地区シェッド嬢の2階	コロンバスデー報告	北海道家庭学校文書（書簡）資料番号51413
1912	1		フォールリバー	フォールリバー貧児教育少年倶楽部視察	北米遊記84-89頁、「米国最大の少年倶楽部」斯民第6編12号
1912	1	11	フォールリバーからボストンへ	ジョージ・ケーリ氏と大学殖民事業・新聞小僧倶楽部視察	北米遊記90頁、「米国の新聞小僧倶楽部」斯民第7編11号
1912	1		ボストン	ボストン市西端チェンバース地区女子殖民館視察	「ウキラード嬢と女子殖民館」北米遊記96頁
1912	1	30	ボストン	ボストン市ウェストロックスベリー地区警惰（実業）学校視察	「ボストン市立警惰学校」北米遊記152-157頁
1912	2	5	ボストン市ロックスベリー地区	米国最近の慈善事業	「通信」人道84号（1912年4月5日）
1912	2	15	ニューヨーク州へスチングス	紐育少年感化院視察	「少年村」北米遊記145-152頁
1912	2	15	ニューヨーク	少年村、少年感化院、実業学校、女子感化院視察	北米遊記159-165頁、人道84号（1912年4月5日）127号（1919年11月15日）
1912	2		ニューヨーク発	『サーベイ』誌インタビュー	The Survey April 20 1912, p.118、北米遊記215-222頁
1912	2	25	シアトル	篠崎氏と少年裁判所訪問メリル氏と面会	「フリービルの別天地」北米遊記31頁、184-187頁
1912	2	26	シアトル	ジョージ氏とワシントン湖警惰（実業）学校訪問	「シヤートルの救済事業」人道85号（1912年5月5日）北米遊記31頁、187-190頁
1912	3	1	シアトル発	日本郵船（貨物船）讃岐丸に乗船	「シヤートルの救済事業」人道85号（1912年5月5日）北米遊記190頁
1912	3	18	横浜港	帰国	「海外近事」人道84号（1912年4月5日）Japan Weekly Mail 4 March 1912